

『きっと いつの日か』 制作のあゆみ

- 2014年11月7日 『吉本興業地域発信型映画「ぼくらの映画(仮)」について』というメールがかかみがはらフィルムコミッションより発信され、市民スタッフが募集される
- 10日 映画の概要説明
監督・脚本家・プロデューサーとシナリオの基本構想のための意見交換
市民スタッフが各務原市をイメージする映画のストーリーを出し合う
- 21日 タイトル未定の映画の構想案が市民スタッフに提示される
- 23日 映画スタッフの役割説明 担当分け・グループごとに話し合い・準備
- 25日 「無題」脚本初稿
- 29日 「ぼくらの映画」出演者オーディション ロケハン
- 30日 監督を交えた全体打ち合わせ
「SOMEDAY(仮)」脚本二稿
- 2014年12月2日 助監督・制作担当者が準備のために各務原に以後滞在する各パートナーと顔合わせ・打ち合わせ
- 5日 『きっと いつの日か』決定稿
- 8日 『きっと いつの日か』総スケジュール(仮)発表
- 9日 スタッフ・キャストが各務原に入る
オールスタッフ顔合わせ・最終打ち合わせ
- 10日 **クランク・イン**
川崎重工業(株)
カフェ カーロ
公式記者会見
- 11日 クラブ
各務原市役所前駅
大堀邸
- 12日 かかみがはら航空宇宙科学博物館
(有)大堀研磨工業所
東海中央病院
冬ソナストリート
那加メインロード
- 13日 川崎重工業(株)
ピアゴ
学びの森
市営住宅 旭ヶ丘住宅
各務原大橋
東海中央病院
- 13日 深夜 **クランク・アップ**
カフェ カーロにてスタッフ・キャスト打ち上げ
- 2015年3月28日 沖縄県沖縄市コザのレッドカーペットにて作品PR
第7回沖縄国際映画祭地域発信プロジェクト作品として那覇市桜坂劇場にて『きっと いつの日か』初上映
- 2015年8月30日 各務原市にて『きっと いつの日か』凱旋上映



台本とスケジュール表



撮影現場



沖縄国際映画祭

発行：Fun Fan Media かかみがはら

「何かオモシロいことをやろう！発信しよう！」をテーマに集まった老若男女が、映像制作による地域プロモーションを行っている団体です。市内のイベント・名店・活躍する人々取材し制作した映像は、YouTubeやFacebookで公開しています。



ロケ地協力者からひとこと

川崎重工業(株) 総務課 藤後智一さん

依頼を受けた時は、正直びっくりしました。直感的には取り扱っている製品からしても対応が難しいかと。でも、各務原市担当者の方々の熱い思いと、弊社経営幹部の後押しで撮影可能となりほっとしました。撮影クルーにも十分な配慮をしていただき、また弊社の職場の方々も快く受け入れていただき、撮影は思いのほかスムーズにできました。

30分の短編映画ですが、夢と感動に満ち溢れ、各務原市の素晴らしさが表われている映画となっています。川崎重工業のPRも十分にされており、地域のため、会社PRのめに協力でき良かったです。

(有)大堀研磨工業所 大堀 憲さん

自宅の撮影は、家族も興味本位で見ていましたが、夜中まで何回も撮りなおしてなかなか撮影が終わらないので、最後はいつ終わるのかとヤキモキしていました。

機械加工する俳優さんの操作方法の覚えのはやさに、さすがプロの観察力だとびっくり。

モノづくりという意味では、大堀研磨も映画作りも同じ。こだわりを持って妥協しない熱意が、スタッフ・キャストの一体感を生み、自信を持ってお客さんにみせる映画ができる。お客さんは、大切な時間を映画鑑賞に使ってくれるのだから、いい加減なものには作れないという監督の言葉を従業員に伝えました。



大堀邸



ピアゴ



川崎重工業(株)



島崎町公民館

市民スタッフからひとこと

広報・メイキング班 服部視紀子

撮影期間は、12月ということもありどの現場も寒く、その中でも撮影最終日の夜の東海中央病院の駐車場は、あまりの寒さに頭がぼーっとして意識が遠のいていく感じさえました。でも、この寒さの中、クランクアップは本当に感動的で、一気に体の中から熱いものが込み上げてきたことを覚えています。

最初は、被写体との距離感がなかなかつかむことができなかったり、現場の空気を読めず苦労しましたが、わたしたちが記録した画像がこの映画の記録になれば幸いです。

美術・装飾班 河合由貴

この映画で使用した小道具は、全部で約210点にも及びます。台本から必要な物をすべて書き出し、準備したのは、美術・装飾班の市民ボランティアスタッフです。

例えば、置き時計1つにしても1個用意すればいいのではなく、候補として4~5個用意し、監督がイメージするものを選ぶように準備をしました。

他にも、主人公悠希の部屋の飾り付けや衣装の準備、俳優さんたちの着替えなども美術・装飾班の市民スタッフが担当しました。ぜひ注目してご覧ください！

エキストラ班 横山香菜恵

撮影準備の期間が短く、オーディションの周知、エキストラの募集に苦労しました。エキストラには、市民スタッフにも出演の協力をしてもらいました。

悠希の子ども時代の二人も地元の仲の良い兄弟です。現場では、リクエストしたポケモンの絵を塩野さんに描いてもらったり、ステレオ太陽族さんに遊んでもらったり、リラックスして撮影にのぞんでいました。

お知り合いが出演しているか、ぜひ探しながら映画をご覧ください。

現場スタッフ班 間 弘志

撮影の準備時にまず制作備品車を用意し、制作備品の収集を行いました。撮影でしか使用しない物なので一般のお店になく、代替品で対応するものもありました。

撮影の4日間は、早朝から夜遅くまで現場につきっきりの日もありました。常に緊張感があり、ずっと周りを気遣いながら諸事対応をしていました。

各々担当が違うのに、『みんなで映画をつくっているんだ』という一体感をもち続けながら撮影できたことをとても誇りに思います。撮影終了時の現場スタッフ班の笑顔が、いまでも心に焼きついています。

食事班 浅野寿子

食事班の思い出のロケ地は冬ソナストリートです。

寒い中、夜遅くまで続いた撮影で、食事班は温かい『おでん』を出演者、スタッフの皆さんに振る舞え、少しですが温まっていたことがとても良い思い出となっています。

あと、島崎町公民館も忘れられません。あの撮影の4日間、自分の家より長いた思い出の場所です。撮影時、現場をなかなか見ることができない中、みんなで楽しく食事を作り、どんな映画ができあがるのかワクワクしていました。

ロケ地班 大島 聖

居酒屋のシーンでは、カフェ カーロさんにご協力いただきましたが、忘年会シーズンということもあり、なかなか撮影場所が見つからず、一番苦労しました。

川崎重工業内のロケ地を探すのに、内部及び外部調整にとっても苦労しました。川崎重工業の藤後さんのご尽力に感謝します。